

俳句が輝くとき

岸本尚毅

水晶をものはや産まざる山粧ふ 藤田 湘子
眼前に紅葉した山がある。その山はかつて水晶を産したが、今はもう採れない。山で採れた水晶は、ときには地元の名家の客間に飾られたことであろう。

どんぐりの土の凹みにはやなじみ 深見けん二
団栗が落ちてゐる。凹んだところに多く落ちてゐる。地べたの団栗は次第に土を被り、土になじんでゆく。

卒業の涙を笑ひ合ひにけり 加藤かな文
卒業生同士が「お前泣いたじゃないか」「そういうお前こそ」と笑い合っている。

雛の舟ときどき雛をこぼしつつ 仙田 洋子
舟に乗せた流し雛がときどき舟から落ちるのである。冬空や花とも見ゆる柿の蒂 山西 雅子

冬空を背景に、柿は枯木となっている。枝には、実が落ちた後の蒂の部分だけが干からびて残っている。その形が何かの花のようにも見える。

この五句、どれも飽きの来ない句である。私は三十年

黄の蝶の倒れやすきが芝の上 加藤かな文
帯締めて雨に頼づく針祭 名取 里美

（俳句「俳句研究」より）
ようするに私はこんな句を好む、と勝手に言っているだけであるが、あえてここに抜いた句の特徴を挙げる。五七五にすんなり収まっている。切れが明らかである。季節がその季節らしく使われている。難しいことは言っていない。日常のふとした感慨が、眼前の情景の写実かである。総じて、いかにも俳句らしい、おとなしい俳句である。

しかしこういう句に出会ふと、俳句とつき合っていてよかったと思う。これらの句に詠われた事柄の多くは、俳句として書かれることがなければ、作者の心の中の呟きとして浮かんで消えるような事柄である。あるいは呟きにさええならず、作者の脳神経の上を去来する微少な信号で終わつたかもしれない。それが俳句の形を与えられることによって、宇宙の一事項として読み手に共有されるのである。

鴨長明ならずとも、人生とは水に浮かぶ泡沫のようなものとは万人の感慨であろう。人生の無常の自覚は、諦

以上俳句を読み続けているが、句に対する反応は「ああ、またか」と「へえ、なるほど」に大別される。どういう句に対して「へえ、なるほど」と反応するのだろうか。本稿のために書き抜いた句の中から「へえ、なるほど」と思った句をいくつか挙げる。

その頃の上海憶ふ虚子忌かな 下村 梅子
御齡に近づくことも虚子忌かな 深見けん二
上州や月がのぼれば草の影 大峯あきら
冬深しときどき夢に驚いて 矢島 渚男
あまつさへ転ぶ氷雨の舟着場 正木ゆう子
門松のあたりに立てば暖かく えのもとゆみ
看護婦のそこをりたる夜半の秋 綾部 仁喜
鬼灯の赤からずとも青からず 綾部 仁喜
神在ればなべて拜むや冬の島 相子 智恵
君と年越すや即席麵の蕎麦 相子 智恵
ごみ箱の周りのごみや初日影 神野 紗希
残菊の向きさまさまに供へけり すずきみちこ
夕野分金魚明るき方へ寄り 石嵐 岳

念への契機ともなり得るし、逆に、一度しかない人生を濃密に生きようとする動機にもなり得よう。無常の思いがあるからこそ、人は無常を忘れるほどの熱狂、好奇、探求、献身へ赴く。それが宗教、科学技術、芸術、産業など、ありとあらゆる人の営みの心的なエネルギーと数ってきたのではない。生は、死ゆえに輝くのである。俳句もまた、このような人の営みの一つ。人間の多様な営みの中にあつて、俳句はちよろちよろと流れる微細な支流といえようか。しかし俳句もまた、俳句として輝くときがあるはず。俳句はどんなときに輝くのか。飯田蛇笏は「なにが世のなかで最も地味な為事か」といって、俳句文芸にたずさわるほど地味なものは外にあるまい。「古金欄のくすんだ微光を追うて、俳句生活にはいつていることが自覚された」と書いた（『山廬集』序）。我々の句が古金欄かボロボロ布かはわからないが、少なくともある程度以上に俳句に深入りした人は、古金欄のような微光を求めて俳句という文明の辺境に踏み込んだはず。俳句が最も俳句らしく機能するとき、そこに詠われた瑣事は瑣事、俗事は俗事として、ひそかな微光をまとう。そうでなくては俳句に携わる意味はない。